

## エーロ・サーリネン：CBSビル

「CBSビル」[1960-1965] 設計=エーロ・サーリネン

ある摩天楼の歴史 キアラ・バリオーネ

参照 | 本誌pp.3-27

1962年4月12日、アーレン・サーリネンはフランク・スタントン——1946年からコロンビア放送(CBS)社長——に宛てて、『CBS本社ビル：ある摩天楼の歴史』と題する本の出版に関する覚書を書いた。「これは決定の要所要所でアイデアが作動してきた、そして今後も作動するであろう建物です。1冊の本でその物語を語れるのなら、高額なプロモーション以上に意味があるでしょう。(……)本書は永続的に重要な意味を持つ書物になるはずです。なぜなら、一般的の読者にも建築とただの建物の違いを分かりやすく説いてくれるからです」[注1]。

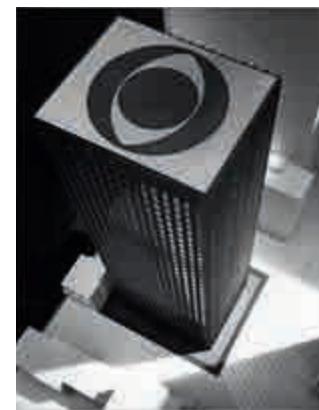
エーロ・サーリネンは1961年9月1日に没した。CBSのための高層ビルの設計案は、彼が死ぬ前に実質的に固まつており、その数日後に新聞紙上で発表された。数ヶ月を経た1962年6月に工事が始まり、1965年の初頭に竣工した。

大企業のさまざまな要求に応えるサーリネンの才能を示す明瞭な事例となったニューヨークのCBS本社ビルは、

建築家と建築主の共通の意志から生まれた。それは、慣習的で反復的な高層オフィスビルばかりが並ぶ状況の中でその唯一性を主張し、アーレン・サーリネンの定義によれば、「ただの建物」ではなく「建築」たることを自らに課す高層ビルを実現するというものだ。この結果に到達するまでに糾余曲折があり、CBSの取締役会長だった<sup>セカンド・マン</sup>ウィリアム・ペイリーと彼の「機関助手」フランク・スタントンとの意見が対立し、決断が下されない状況も多々あった。2人の幹部は正反対の性格を持っていた。ペイリーは魅力的な人物だったが、衝動的で享楽的な生活を愛した。建築とモダンデザインに特別の興味を抱いていたスタントンは、内向的で理性的、几帳面で完璧主義者だった[注2]。

1928年に「取締役会長」ペイリーが東海岸の小さなラジオ局から出発して創りあげたCBSは、彼の指導下で大きな成長を遂げてラジオ時代からテレビ時代にうまく乗り換え、1940年代末には商業的に成功した。CBSはこうしてラジオ・テレビ業界のビッグ・スリーのひとつとして、NBCと共に首位を争い、ABCより優位を誇るようになった。

1929年からCBS本社はマディソン街485番地の名もなき高層ビルに入っていた。そこは早い段階で同社の必



CBSビル | 模型 |  
1951年にウイリアム・ゴールデンが  
デザインした「目」の  
CBSロゴがついている

要性にそぐわなくなってしまった。58丁目通りと59丁目通りに挟まれたパーク・アヴェニューに新本社を建てる野心的な計画が、1935年にウイリアム・レスケーズによってまとめられたが、ペイリーの意向で却下された[注3]。時は過ぎ、CBSはラジオ局とテレビ局を置くためにマンハッタンにいくつものビルを別に借りるか、購入するかせざるを得なくなつた。会社の規模に比して小さすぎたマディソン街の社屋は、1950年代末にはオフィスビルとしての標準的な要件にもはや対応できなくなっていた。さらに、ロックフェラー・センターのRCAビルに本社を構えたNBCとの商業的競争を進めるために、CBSは買収した「ティファニー・ネットワーク」のイメージを強化して、同社をよりよく体现するような社屋を必要としていた。

敷地の選定は簡単ではなかった。スタントンはあるインタビューに応えて、さまざまな解決策を検討し、最終的に、ロックフェラー・センターから少し離れた、52丁目通りと53丁目通りに挟まれた6番街沿いの土地の購入——不動産開発業者ウイリアム・ゼッケンドルフのウェップ&ナップから提案された——について、「タイム=ライフ、ロックフェラー・センター開発」に参入する考えに魅かれてペイリーが許可を出すまでの、長いプロセスを振り返っている[注4]。

1939年に頭上を通っていた鉄道の高架が取り壊された後、6番街では1950年代後半に建設ブームが到来し、特に46丁目通りと57丁目通りの間に集中して、小さな建物の細かな屋並みから、大企業の本社が投機的なオフィスビルへと徐々に変わっていました。

この意味で重要な一歩となったのが、1959年12月に完成した出版大手のタイム=ライフ社の社屋建設である。ハリソン、アブラモヴィッツ&ハリスが設計したこのビルは、ロックフェラー一族の巨大な不動産投資であり、6番



CBSビル | 工事現場、1964年夏



CBSビル | 1965年5月4日 | 前景左にシェリーヴ+ラム+ハーモンが設計したJ.C.ペニー・ビル(1965)、右にSOM設計のエキタブル・ライフ・アシュアランス・ビルが見える

街のこの一画の刷新と、ミッドタウン西側の再開発に先鞭をつけた[注5]。

#### [ザ・ベスト・マン]

スタントンが回想したように、CBSが購入した土地は約2年間も使われないままでいた。なぜならスタントンとペイリーの間で、建築家を誰にするか、またどのように進めるかについて合意に達しなかったからだ。建築家の選定にも時間がかかり、激しい議論の的になつた。ただし、ペイリーの自伝はこのことに関して黙して語らない。ペイリーが唯一言及するのは、1958年11月21日に昼食をとりながらサーリネンと初めて高層ビルのアイデアを議論したことだけだ[注6]。おそらくこれは予備的な話し合いだろう。と言うのも、1960年7月になってはじめて、サーリネンへの委嘱が公式に日刊紙上で告知されたからだ。

ペイリーがウォレス・ハリソンへの設計依頼に傾いていたのに対して、スタントンは、ハリソンはリンカーン・センターのメトロポリタン・オペラハウスの設計という「泥沼にはまること」であり、また国連本部以後もはや注目に値する建物を建てていないと考えていた。スタントンはリンカーン・センターの状況について建設委員会メンバーとして最新情報を接していた。彼はこの役目を通して、1958年9月にヴィヴィアン・ボーモント劇場の設計に尽力していたサーリネンの才能を知ることになる。

高層ビルを一度も実現したことがなく、マンハッタンの中心部にまだ建てた実績がないという事実はエーロに有利に働き、ゴードン・バンシャフトのようなスタントンと友情関係にあった他の建築家より彼を優位に置くことになった。

サーリネンのキャリアは明らかに上り調子だった。1956年7月に彼の顔が『Time』誌の表紙を飾り、彼を同世代を先導する建築家の一人と称賛する記事が載った。デトロイト近郊のウォーレンに建ったゼネラル・モーターズ・テクニカルセンターの成功によって、彼はIBM、ベル・テレフォン、ディア・アンド・カンパニーといった大企業の建築家としての信用を高めていった。さらに、1959年6月にニューヨークのアイドルワイルド空港[現ジョン・F・ケネディ空港]のTWAターミナルの工事が始まっていた。この計画は実現以前からメディアから大きな注目を集めている。1957年には、長年中断していたセントルイスのゲートウェイ・アーチの計画が再開された。これは人目を引く革新的なフォルムを創造するサーリネンの才能のまたとない証明となった[注7]。

このようにスタントンは、フィンランド出身の建築家にはマンハッタンの眺望の中でひときわ目立つ建物——ペイリーと共に通の目標——を考え出せるはずという点に賭けることができた。スタントンは述べている。「私はニューヨークのオフィスビルに戦後繰り返されたスタイルに飽き飽きしていた。それらの過剰な身振り、ガラスやチリンチリンと鳴る金属、過度に繰り返される単調さと退屈さ。私はCBSにカーテンウォールのステレオタイプを壊して欲しかったし、同時に、会社にふさわしい気品ある社屋を持たせたかった。CBSをニューヨークのオフィスビル・デザインにおける新時代の最先端になってほしかった。私が知る限り、その任務を任せられるのに最良の男がエーロ・サーリネンだったのだ」[注8]。

1960年の夏から冬にかけて、サーリネン事務所では、6番街に建つ高層ビルの立面と敷地におけるその配置をめぐり、建築法規で許された容積率の評価に基づき、投資の経済的利益と関連付けながら、さまざまな解が検討された。そこではCBSが不動産コンサルタントに依頼した分析結果が活用された。

この時期、ニューヨークのゾーニング規制法の改正手続き——シーグラム・ビルとレヴァー・ハウスが引き金となって——が進んでいた。そこで導入された FAR(延床面積の敷地面積に対する割合:容積率)は管区によって多様で、広場やアーケードの実現には高さが奨励され、セットバックに基づく高層ビルという主流モデルの克服を後押しした。独立したタワーのデザインに向かっていたサーリネンは、SOM事務所のバンシャフトやエド・マシューズと競争したためもあって、各階に約1,800 m<sup>2</sup>を確保して高層ビルを経済的に持続可能なものにする結論に達した。彼は都市計画委員会と接触することで新しいゾーニング法の制定に伴う交渉プロセスに参加し、そうした延床面積が可能な法文を獲得した[注9]。したがってCBSは、1961年12月15日に施行された新ゾーニング法に従ってニューヨークで実現された、最初の高層ビルのひとつとなつた。新法は、基部から頂部まで立面が変化しない、敷地の60%を占めるタワー建築を可能にしたのである。

[初期のアイデア:選別プロセスの結果としての解]  
CBS本社ビルのためのサーリネンによる予備調査[注10]では、おそらく建築主側から特別の注文を受けた後に、掘り下げた広場(サンクン・プラザ)のアイデアが再び現れた。この方向性の兆候は、実現されなかったスター・プラザ



カーソン&ランダン事務所:  
スター・プラザ、ニューヨーク、1956



マルセル・ブロイヤー:バルチモアの  
チャールズ・センター設計競技に  
提出された高層ビル設計案、1960

のための設計案に代表される。53丁目通りと54丁目通りに挟まれたパーク・アヴェニュー399番地に計画されたスター・プラザは、1956年にカーソン&ランダン事務所がカーン&ジェイコブス事務所と協働で設計案を作り、スタントンとペイリーが大規模な不動産開発として推進していた。彼らはこの計画に、ペイリーの元義兄で企業家のヴィンセント・スターも巻き込んでいた。CBS本社も入るはずだったこの建物は、パーク・アヴェニューからセットバックさせた1つのタワーと、地下に掘り下げて周囲を店舗、レストラン、銀行で囲んだ広場から構成されていた。この提案はおそらく、ロックフェラー・センターの元来の設計案にインスピレーションを得たと思われる[注11]。すでに触れたように、RCAビルに本社を置いていたNBCと競合するというCBS幹部の意志と合致した参考源と言えよう。

スター・プラザの設計案に関してより明確にこのモデルを想起させるのは、サーリネン・アーカイブに所蔵される、年記のない数点の平面スケッチである。それらを見ると、車道より低いレベルの公共空間が高層ビルの下に設けられている。広場の周りを店舗が囲み、噴水が中央か、また別のスケッチではロビーに背を向けて置かれている。

自分の慣れ親しんだ設計方法に従って、サーリネンは数多くの、互いにかなり異なる仮説を探り始めた。いくつかのスケッチでは規則的な支柱による直角のグリッドが想定されていたり、また別のスケッチでは支柱の数を減らして、成型したビームまたはアーチで連結し、斜めのグリッドが形づくりられたりした。

素早いタッチで全体を描いたパースや平面スケッチを見ると、表現力の強い、ほとんど生物に似た形態の構造

## ヘザーウィック・スタジオ

Saarinen Papers, Archives of American Art, Smithsonian Institution, b.2, f.6.

28——Cfr. R. Martin, "What Is a Material?", *Eero Saarinen. Shaping the Future*, edited by E.-L. Pelkonen, D. Albrecht, New Haven-London 2006, pp.73-75.

29——C. Welles, "How it feels to live in total design," *Life*, 29 April 1966, pp.59-60.

30——A.L. Huxtable, "CBS: Eero Saarinen's Somber Skyscraper," *New York Times*, 13 March 1966.

31——P. B. Conway, "Design at CBS," *Industrial Design*, February 1966, p.49. Cfr. M. F. Shmertz, "Distinguished Interior Architecture for CBS," *Architectural Record*, June 1966, pp.129-134; E. Larrabee, M. Vignelli, *Knoll Design*, New York 1981, pp.128-142.

32——CBSビルに対する批評の変遷については以下。Stern, Mellins, Fishman, *op.cit.*, pp.406-410.

33——*Eero Saarinen on His Work*, *cit.*, p.16.

34——J. Jacobs, "New York office boom," *Architectural Forum*, March 1957, pp.105-113; P. Blake, "Slaughter on Sixth Avenue," *Architectural Forum*, June 1965, pp.13-19.

35——引用は以下。A. Lange, *Typeurier and Trademark: Architects. Designers and the Corporate Utopia. 1956-1964*, Ph.D Dissertation, Institute for Fine Arts, New York University 2005, p.162.

36——サーリネンの「It's even going to make the Seagram Building look gaudy」という発言は以下に引用されている。E. Larrabee, "Saarinen's Dark Tower. The CBS Bulding and How It Grew," *Harper's Magazine*, December 1964, p.55. シーグラム・ビルと比較した批評は以下。B. Probst, "CBS: Somber Power," *Progressive Architecture*, July 1965, pp.187-192.

37——Cfr. W. H. Whyte, *The Social Life of Small Urban Spaces*, New York 2004(初版1980), tables on pp.26-28.

38——Cfr. J.S. Kayden, *Privately Owned Public Space. The New York City Experience*, New York 2000, pp.157-158; A. Tate, *Great City Parks*, London-New York 2015(初版2001), pp.5-10.

### [編注]

本誌881号の表紙デザインについて: CBSのクリエイティブ・ディレクターのルウ・ドーフスマンが、CBSビル21階のカフェテリアのためにデザインした《ガストロタイポグラフィカルアッサンブルージュ》(1966)を参考にした。この作品は、修復を経て、2014年からニューヨークのカリナリー・インスティチュート・オブ・アメリカに展示されている。

### 「ツアイツ・アフリカ現代美術館」

設計=ヘザーウィック・スタジオ

### 穀物サイロの内部で マッテオ・ヴェルチェッローニ

参照 | 本誌pp.28-41

2017年9月にケープタウンのヴィクター&アルフレッド・ウォーターフロント沿いに完成したツアイツ・アフリカ現代美術館(ツアイツMOCAA)は、アフリカ現代アートとそのディアスボラ

に特化した、世界的にも最大規模のミュージアム施設である。文化的拠点として、また国際的水準の展示と教育のプラットフォームとなることを目指している。企業家でアフリカ現代アートのコレクターであるヨッヘン・ツアイツと、ケープタウンのヴィクター&アルフレッド・ウォーターフロント(年間2,500万人が訪れるケープタウン港湾エリアを対象に、不動産開発と整備事業を進める官民共同出資の企業体)の緊密な共同作業の成果であるMOCAAは、記念碑的な穀物サイロ・コンプレックスの内部に置かれた。これは同市の有名なランド



アトリウムを見上げる

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2018 Arnoldo Mondadori Editore

©2018 Architects Studio Japan

マークで、20世紀前半に建設され、1990年から使用されていなかった。かつて南アフリカ国内で第1位を誇った高さ60mの産業建築は、湾岸のスカイラインから突出した姿を見せ、背後には有名なテーブル・マウンテンの巨體が控えている。

穀物サイロの改築計画は、建物に現代的な解釈で手を加え、都市の既存物を設計の競争相手と捉え、また保存・再生・再創造のプロセスを始動させるリソースとみなすロジックに基づいた再利用と結びついている。ケー



低層棟と高層棟の関係を見る



エントランスに向かって見る

プタウンのMOCAAのケースは、多くの可能性の中でも、歴史的産業建築に対するアプローチの過程が示唆的である。過去の産業建築の改修には、必然的に再利用と再設計、増築・成型・省略の作業による既存空間の改変を伴う。穀物サイロ・コンプレックスは、強く結束された鉄筋コンクリートの構造体が特徴的である。7棟からなるサイロの列が6本パラレルに並ぶ、合計42棟のサイロのグリッドで構成されている。これらシリンドー形のサイロ群は、頂部において機能的な冠を戴いて完結する。それは切妻屋根と外周窓を持つ事務所階であった。この第1のボリュームは船舶が係留される埠頭に面して建つ。その脇には、サイロの巨大な姿を完成させるものとして、都市に面する側に2つのボリュームが建っている。こちらのほうが高く、窓のないコンパクトな基壇から隣接するサイロと同じ高さまで、均一な四角い箱とされている。その上層部には複数の階が積み重ねられ、軽々とした付け柱とコーニスの連続としてファサードを際立たせる規則的な構造グリッドによって特徴づけられていた。基壇では鉄骨造のギザギザ屋根の小屋が、貯蔵ゾーンの機能とサイロ内部へのアクセス・フィルターの機能を果たしていた。

ヘザーウィック事務所の設計案は、こうしたすべてと対峙した。その複雑な造形と特徴的な輪郭を保存することで、旧穀物サイロは都市のスカイライン上に記憶として残る。しかしながら、空間の再編と創出によってその内部を刷新し、窓のある高層階をデザインし直した。鉄骨の小屋はエントランス・ポルティコに変身し、小さいほうのボリュームのファサードを形成する建ち並ぶサイロの連続は保存された。コンプレックスの内部ではより抜本的な工事が行われ、通路や部屋のデザインが変更された。サイロ群の大半は、展示室を作るために取り壊された。しかしながら、垂直の空隙に隣接するゾーンでは、トマス・ヘザーウィックは円筒形の穀物庫の巨大さを再創出することに成功した。サイロの内部を階段室と活用し、床から天井まで吹き抜けになった大空間を新たな美術館のアトリウムとして造形する際に、サイロの記念碑性を強調したのだ。このアトリウムは、既存のボリューム群を曲面でカットして創出された。まるで、鉄筋コンクリート造のシリンドーの森の中に挿入された巨大な楕円面が、その面積に相当する部分だけ外科手術的正確さで切除して運び去ったかのようだ。その陰画としてできたのが、彫塑的なボイ



左下にMOCAA、右上にテーブル・マウンテンを見る

ドである。この空間は基部のグリッド構造から屋根の高さまで一気に立ち上がり、屋根には広い水平のトップライトが置かれた。アトリウムは完璧に彫り出された空間で、そこに描き出された雰囲気は、想像される未来あるいは自由に再創造された「ゴシック」時代にふさわしい大聖堂のヴォールトを思わせる。シリンドー群の切断痕は、その内部に、斜めの切開線(天井レベル)から大小の湾曲した楕円形(壁面レベル)までさまざまな輪郭の VOIDを作り出した。それらすべてが、調和のとれた説得的な総和にまとめ上げられている。シリンドーのうち開口部が穿たれた部分には、展望エレベーターと螺旋階段が置かれた。穀物サイロ・コンプレックスを構成する2つのボリュームの内部には、全体として、6,000m<sup>2</sup>の床面積をもつ80の展示ギャラリーが展開する。そこには事務室、カフェテリア、彫



断面模型



断面図



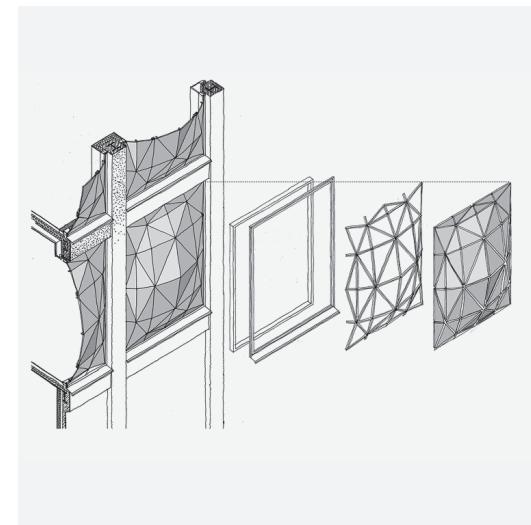
エントランス



アトリウム



サイロの切開による空間構成



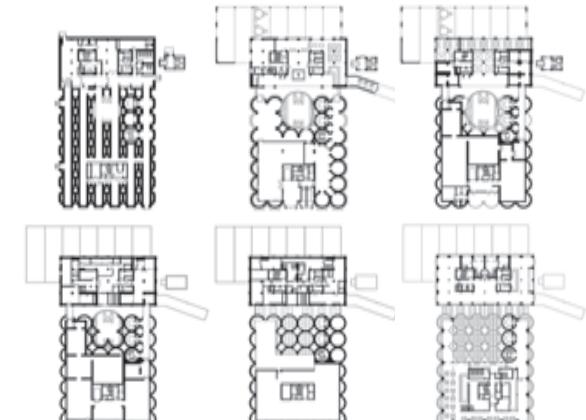
ボウ・ウンドウ:構成システム



ボウ・ウンドウ:内部より見る



映像展示室



各階平面図:左上より時計回りに、地階、1階、2階、8階、6階、5階

刻テラスも置かれた。コンパクトなファサードの大部分は保存され、車道レベルの開口部の一部にのみ手が加えられた。これに対して、もともと窓があった上層階はラディカルなやり方で改変された。

「ザ・サイロ・ホテル」が設けられた高層階では壁が打ち抜かれ、新たなガラス壁のデザインを迎えるために、規則的に直交するグリッド構造がむき出しにされた。ガラス壁は組立式のボウ・ウンドウ型建具として造形され、ヴェネツィアの伝統的なランプやランタンに見られる気泡状のテクスチャーにヒントを得ている。内部に組み込まれた金網が目を引くガラス壁は、縁から凸状にはみ出して、所与の幾何学に支配された三次元的モールディングの効果を創り出す。複数の領域を混ぜ合わせ、設計の多様な世界に属するさまざまな規模の混淆や刺激を促す態

度は、まさしくトマス・ヘザーウィックの仕事のやり方である。彼は建築に力を注ぐデザイナーであり、新しいタイプの家具の考案者であり、疲れを知らない研究者であり、絶え間ない参照とアナロジーを駆使して異なるスケールやジャンルを自在に飛び越える建築家なのだ。

作品:ツイツ・アフリカ現代美術館

設計:ヘザーウィック・スタジオ——

Thomas Heatherwick (design director),

Stepan Martinovsky (project leader), Mat Cash (group leader)

現場監理:Van der Merwe Miszewski Architects,

Rick Brown Associates, Jacobs Parker

協働者:Simona Auteri, Ruggero Bruno Chialastri,

Yao Jen Chuang, Francis Field, Sarah Gill, Xuanzhi Huang,

Changyeob Lee, Julian Liang, Débora Mateo, Stefan Ritter, Luke Snow, Ondrej Tichy, Meera Yadave, Lucie Beauvert, Einar Blixhavn, Erich Breuer, Alex Flood, Hayley Henry, Hannah Parker, Luke Plumbley, Matthew Pratt

プロジェクト・マネージャー:Mace

構造:Arup/Sutherland

サステナビリティ:Arup/Solution Solution

歴史遺産コンサルタント:Nicolas Baumann

不動産開発:Victoria & Alfred Waterfront Holdings (Pty) Ltd

施工:WBHO

建築主:Victoria & Alfred Waterfront Holding (Pty) Ltd.

規模:延床面積 9,480 m<sup>2</sup> / 展示面積 6,040 m<sup>2</sup>

スケジュール:竣工 2017年9月

所在地:Cape Town, South Africa